

汗と関連する皮膚病 ～診断の技量を磨く～

編集担当 馬場 直子

汗と皮膚疾患には切っても切れない深い関係がある。日常診療ではアトピー性皮膚炎(AD)は夏になると汗で痒みが増して悪化することが多く、一方、重症ADでは汗をほとんどかなくなり、夏でも皮膚が汗で潤わず乾燥したままで痒くなり、熱がこもって炎症が増すこともある。また先天的に無/乏汗症の人は体温調節ができず熱中症になりやすく、逆に多汗症の人は汗の臭いや服の汗染みで悩んでいる。本特集号ではこのようにさまざまな汗にまつわる困りごとや疾患をテーマとし、汗と関連する疾患の病態、検査法、鑑別診断、治療法についてアップデートしたいと企画した。

まずは、冒頭「Topics 1」の「発汗障害をきたす疾患の診断と治療」では、発汗障害を疑った場合の問診や所見のスクリーニング法、鑑別診断、治療法の選択肢が示されている。「Topics 2」の「発汗に関連した痒みはなぜおきる？」では、汗に含まれる痒みを生じる物質によって瘙痒が誘発される病態と、その病態理解に基づいた生活指導法が紹介されている。「統計 1」では特発性後天性全身性無汗症(AIGA)30例の解析から、ステロイドミニパルス療法が奏効した例が8割以上あり、とくに早期からの積極的治療介入の重要性が示された。また、発汗試験の結果をまとめた「統計 2」ではAIGAの診断や治療効果の判定において、外来でのミノール法を用いた発汗試験の有用性が述べられている。「治療」では局所多汗症に対して3剤の抗コリン外用薬が販売承認されて治療の幅が一気に広がり、ガイドラインで第1選択薬として推奨されたこと、これらの使用法や効果、注意点などについて詳しく述べられている。

「臨床例」ではX連鎖性低汗性外胚葉形成不全における遺伝子診断と正確な遺伝カウンセリングの重要性が示され、さらに今後の出生前治療の可能性についても言及されている。ほかに無汗性外胚葉形成不全症で汎発性脱毛症を合併した珍しい症例や、骨髄移植後の慢性GVHDに続発した乏汗症の15年後の皮膚生検所見において、汗腺上皮細胞に異常所見が残存し発汗障害尾が恒久的に残っていたことが判明したという貴重な症例もある。

特発性後天性無汗症では全身性と分節性のそれぞれの症例、ステロイドパルス療法の著効例、コリン性蕁麻疹を合併した症例でオマリズマブが疼痛緩和をもたらした例などもある。

一方、多汗症としては、原発性腋窩多汗症に対するA型ボツリヌス毒素局注が掌蹠多汗症にも有効であったという興味深い症例や、治療のための免疫グロブリン大静注療法に伴い汗疱を繰り返した症例も載せてあるのでぜひ参考にしてほしい。